

初めに

これから始まるお話はアドベンチャーゲームです。あなたはこれから、「ミクンサ」と言う少年になって、旅を始めます。命がけの旅ですので、進め方を間違えると、とんでもない目に合います。気をつけてください。

お話を読み始めると、「次は何番へ進みましょう」と言う命令に出会いますので、その命令にしたがって進んでください。また、何通りかの進み方があるときは、慎重に選んで進んでください。

途中で、旅を続けることができない時がありますが、そんな時は「手袋。手袋。手袋。」と言って番号の1(いち)に戻ってやり直してください。

それでは、ページをめくる前に、左の地図を見てください。これから、あなたが、始める旅を表しています。ではご健闘を祈ります。※

メモ

(このページは、あなたの旅で、出会ったものなどを書き込むところです。メモをとると、旅もだいぶ楽になるはずです。)

※挿絵は今回、掲載を省略しています。

はるか遠い昔、アジアの片すみの「ニイカオロ」と言う土地に「クブテ」と言う村がありました。村には、あまり多くではありませんが、人が住んでいて、藁(ワラ)でできた家が立ち並んでいました。その中の一人に「ミクンサ」と言う少年がいました。そうあなたが住んでいたのです。

さて、村の真ん中の広場に、人の形をした大きな石像が立っています。その手には、ボロボロになった手袋がはめられていました。「ミクンサ」が生まれる千年前に、幸せを願った村人が、魔法使いから買ったと言う手袋だそうです。

おかげで、手袋がはめられて以来、村には冬が来なくなり、いつもポカポカした陽気で、花は咲き乱れ、食べたいものは何でも取れました。すべての生き物が喜びに満ちた生活を送っていました。

ところが千年も経てば、どんなものもボロボロになってしまうもの、魔法使いから買った手袋は、今ではすっかり痛んでしまって、見る影もありません。やっと手についている状態です。それだけではありません。手袋がボロボロになるにしたがって、だんだん暖かい日も少なくなり、植物もよく育たなくなっていました。そして今では、人の数も減

り、村は荒れ果て、冷たい風がビュービュー吹き抜けているのです。

五百年ほど前から人々は、そのことに気づき、いろいろと手を尽くしてきましたが、どれもうまくいきません。おそらくこのままでいくと、手袋はくち果てるでしょう。その時は、村が滅びる時なのです。そしてその日はせまっています。」

そんなある日、痛みのひどくなった手袋の裂け目から、古びた一枚の紙切れがバラリと落ちました。ちょうどそこを通りかかった少年がいました。ミクンサ(あなた)です。そして、それを素早く拾い上げると、村長の家へ持っていきました。実はミクンサ(あなた)は、その一人息子なのです。

「父さん、こんなものが石像の手袋から落ちてきました。」

「どれ、貸してみなさい。」

村長は、ゆっくりとベッドから起き、杖について近づいてきます。

△2▽へ進みましょう

△2▽

ミクンサ(あなた)は、その古びた紙切れを渡します。村長は、それを手に取って、しげしげと観察します。しばらく考え込んでいましたが、突然、

「これは、大変なしろものじゃ。」

と、言い出したのです。

「これは、今から千年も昔の地図じゃ。それだけではない、一人の英雄が魔法使いの所へ行ったときの道が描かれておるのじゃ。」

「父さん、それじゃあ、昔、幸せを願った村人が、魔法使いから手袋を買ったという言い伝えは本当だったんですね。」

「まあ、聞きなさい。この地図のわきに、こんなことが書いてある。それはじゃ。その魔法使いの名は、「マヌズミー」と言い、千年に一度、目覚め、その年の春から夏にかけてだけ、山の洞窟から出て食事をすると言うことじゃ。そして秋が来るとまた千年の眠りにつくのじゃ。」

頭の良いミクンサ(あなた)は、村長が何を言いたいのか、すぐわかりました。

「今がその千年目にあたるんですね。また、手袋を魔法使いから買おうと言うんですね。」

「そうじゃ、しかし、わしは、歳をとりすぎた。誰か、この村を救ってくれるものは、ないだろうか。」

しかし、だれも旅に出ようとするものはいませんでした。なぜならば、村を出たとたん、恐ろしいことが、たくさん待っていることを知っているからです。幸せになりたいと言う気持ちは強いのですが、危険をおかしてまで、村のために頑張ろうと言う人が、一人もいなかったからです。

いいえ、一人だけいました。ミクンサ(あなた)です。でも、村長は、猛烈に反対しました。十歳になったばかりの少年には、あまりにも旅が厳しすぎるというわけです。

ところが、みんなが、寝静まった時、ミクンサ(あなた)は地図を盗み出し、こう誓ったのです。

「皆さん、きっと、魔法使いマヌズミーから幸せになると言う手袋を買って帰ります。待っててください。」

こうしてミクンサ(あなた)の旅が始まったのです。

△3▽へ進みましょう

△3▽

朝を待たずに、旅立ちました。ミクンサ(あなた)の持ち物と言えば、わずかな食べ物とそれを入れるための綿のザック、ズボンのポケットには、3枚の銀貨、そして、手には地図を握りしめています。こわくないと言ったらうそになります。でも、誰かがやらなくてはならないのです。くじけそうな心をふるい立たせ、地図にしたがって、南へ向かうのです。

△4▽へ進みましょう。

△4▽

二日も歩くと、昼間なのに、あたりはだんだん暗くなってきます。どこを見ても、背の高い木が、上からおおいかぶさってくるような、とても気味の悪い森に入り込んだのです。太陽の光は、地面にはほとんど、とどいていません。ミクンサ(あなたは、奥へ奥へと進んでいきました。

しばらくすると、あかりがもっている木が見えてきました。いえ、あかりと言うより、光です。その光は不思議な力で、ミクンサ(あなた)を引き寄せます。自分の考えとは別に足が勝手に進むのです。やがて光を出している木の前へたどり着きました。

よく見ると、光は木じたいからではなく、木の枝にぶら下がっている、りんごのような形をした果実から出ているのがわかります。それをじっと見ているうちに、とても、お腹が空いてきました。

目の前にある果実はとてもおいしそうです。ザックには、もうほとんど食べ物は残っていません。しかし、とても危険な感じもします。

もし、その果実を食べようと思うなら、 $\wedge 17 \vee$ へ。もぎ取るけれども、今は食べずにザックに入れようと思うならば、 $\wedge 10 \vee$ へ。安全を考えて、果実を取らずに過ぎようと思うならば、 $\wedge 24 \vee$ へ進みましょう。

$\wedge 5 \vee$

ミクンサ(あなたは、厳しい砂漠を乗り越えることができました。風

は歩くたびに涼しくなり、喉にも優しくなってきました。やがて、小鳥のさえずりや虫の鳴く声が近くなり、緑の草や木々がだんだんと目立つようになってきました。

足もとをリスがすり抜けたり、鹿が目の前を横切ったりするようになった頃、泉が湧き出ている場所を見つけました。透明な水をこんこんとわきたたせているのです。それほど大きくない泉ですが、たくさんの動物が仲良く並んで水を飲んでいましたので、ミクンサ(あなた)も、そおっと仲間入りして、水を飲み、体の汚れを洗い流しました。

安心してほっとしたため、眠りにつきました。やがて夜になりましたが、心地よい夜は、ミクンサ(あなた)を包み込み、さらにやわらかな夢をさそいました。それは、なつかしい村の夢でした。魔法使いから手袋を買って、石像にはめたところ、たちまちあたりは春になり、花はさきみだれ、人々は楽しそうに歌い踊るのです。

やがて朝になりました。涼しげな風と小鳥のさえずりで目を覚ましました。ミクンサ(あなた)は、今のは夢でまだ自分の旅は終わっていないことに気づきました。

「村にいるあの人たちのためにも、僕が頑張らなくてはならないんだ。」

と心に言い聞かせました。

^15^進みましょう。

怪物は、湖に帰っていきましたが、ぐずぐずしていると、また戻って何を言い出すか分かりません。そこで、大急ぎで、小高い岩山を登っていきました。

さて岩山を登りつめると、その向こう側には砂漠が広がっていました。地図を広げると、必ずここを通らなければならないと書いてあります。しかし、ガラガラと太陽が照りつける、この広い砂漠をこえるには、何か工夫が必要です。

頭の良いミクンサ(あなたは、近くに生えている植物を使うことにしました。木や枝や、つるや葉を使って大きなテントを作り、つよい日差しを避けるのです。砂漠の空気が乾いているので、日陰にさえ入ればとても涼しいのです。こうして、ミクンサ(あなたは夜になるのゆっくり待ちました。

昼間とは打って変わって、涼しい夜が来ました。そこでテントをたたみ、ザックの上から背中にしぱりつけると、元気よく歩き始めました。空の星は、砂漠を照らし、ミクンサ(あなた)を案内します。だから暗い夜もちっとも怖くないのです。

やがて砂漠に朝がやってきました。砂は、みるみる暑くなり始め、太陽は、ミクンサ(あなた)の体突き刺すように照りつけま

す。いよいよ暑くなった時、テントを広げ、体を隠しました。

このようにしてはじめての十日間を無事に過ごしました。このままでいくと、砂漠もあと十日で終わりそうです。

△14▽へ進みましょう。

△7▽

ミクンサ(あなたは)、不思議な果実のおかげで、何とか地図に書かれている向こう岸にたどり着くことができました。そして、たどり着くと同時に、深い眠りにつきました。

三日間と言うもの、死んだように眠り続けました。さて、四日目の朝になると、ほったに生あたたかいものを感じるようになりました。意識が戻るにつれて、それが何だかわかりました。銀色の目をした猫です。猫がほったをベロベロなめていたのです。もう顔はべちょべちょ。ミクンサ(あなたは)、やっこの思いで猫をどかして起き上がりました。

空にはまぶしく太陽が輝いています。あたりを見渡すと、ごろごろとした岩の山と、岩と岩の間から、高い植物がはえているのがわかります。その枝からは、時々オレンジ色の熟した実が、ぼとりと落ち、そこからとても甘い匂いがただよってきます。気がつくと、自分の顔もオレンジ色にぬれています。どうやら、その実が顔に落ち、それを銀色の目

をした猫がなめていたらしいのです。

突然、静かな湖が波うち始めました。波は、激しく、岩にぶつかり、くだけちりました。続いて、不気味な音が、バシヤリバシヤリと聞こえて来ます。音がすぐそばに近づいた時、ミクンサ(あなたは、岩のかけに身をかくしました。

それはミクンサ(あなた)にとって、幸運だったと言えるでしょう。なぜなら、目の前を十メートルもある怪物が歩いていくではありませんか。全身は緑色のうろこにおおわれて、角が頭の上に一本あります。目は、3つで、別々に動いています。

ミクンサ(あなたは)はガタガタと震えます。恐ろしいことと言ったらありませんでした。

怪物は、通り過ぎると思ったとたん、ピタリと止まりました。そして、ギロリとこちらをにらむと、巨大な腕を伸ばしてくるではありませんか。もう体をかわすひまなどありません。

グシャ！バリバリ！

すさまじい音が鳴りひびきました。

△13▽へ進みましょう。

△8▽

橋を渡り、地図にしたがって南へ3日ほど歩くと、大きな湖が見えて

きます。地図を見るとどうしてもここを渡らなくてはなりません。しかし、向こう岸は遠すぎて、全く見えません。そこで、ボートがあればと思つて、岸辺をずいぶん探してみましたが、ボートどころか、丸太一本転がっていません。ミクンサ(あなたは)、困り果ててしまいました。

そうこうしているうちに、おでこにぼつり、冷たいものを感じました。見上げると、さっきまで、あれほど晴れ渡っていた空が、みるみる暗くなり、雨を降らせ始めたのです。

突然、ぴかっと目くらむほどの光が走り、ドーンという音とともに、地面がぐらつとゆれました。なんと言うことでしょう、後ろにあった草木は、真つ赤な炎に包まれたのです。ゴーと言う音を立て、どんどん広がっていきます。ミクンサ(あなた)が、振り返った時は、すぐ後ろまで、炎が迫っていました。

もう、逃げ場はありません、黒こげになるのを待つだけです。いいえ、待つてください。一つ逃げ場がありました。湖です。ミクンサ(あなた)は、迷わず湖へ向かってかけ出しました。もしあなたが、森で光る果実を食べていたなら、[^]12^vへ、食べずにザックの中に入れたなら、[^]26^vへ、危険を犯すのはやめて、果実を取らずに、通りすぎたなら、[^]19^vへ進みましょう。

二人が手をつないでいると、みるみる姿はワシになり、くちばしを雪につき立てると、ミクンサ(あなた)のまわりをぐるぐる回り始めました。そして、正確な二重の円ができたとき、地面は先ほどにも増して、オレンジ色に輝き始め、ミクンサ(あなた)をまた包みこみました。すると、地面がポツと音を立てたかと思うと、体が宙へ浮かび上がったのです。

十メートルほど上りつめると、オレンジ色の光は消え、体は、静かにもとの場所へ降ろされました。

二羽のワシは、人間の姿に戻り、横たわっているミクンサ(あなた)を、心配そうに見下ろしています。

ミクンサ(あなた)はゆっくり目を覚ましました。しばらく自分がどんな目にあったのか分かりません。あたりを見回しても、真っ青な空と一面に広がる真っ白な雪しかありません。ただ、自分の目の前に、にっこりと笑っている子供と青年がいたかに見えたのですが、すうっと消えていったのが気になりました。

「確か、吹雪の中を歩いていたはずなんだが……。そういえば、突然ものすごい風が吹いてきて、あっという間に飛ばされたんだっけ。」

しかしそれ以上はどうしても思い出すことができません。もちろん、二人の魔法使いの弟子が命を救ってくれたなど、思いもよらぬことです。

「とにかく、僕は、この山の頂上にいることだけは確かだ。」

とつぶやきました。^23^へ進みましょう。

^10^

不思議に光る果実を枝からもぎ取りました。でも、食べるには、とても危険な感じがします。そこで、お腹は、グーとなるのですが、がまんして、ひとまずザックの中に入れました。

すると、突然、目の前の木がぼやっとしたかと思うと、それは美しい女の妖精の姿になりました。

「その果実には素晴らしい力がかくされています。きっと、これからの旅で役立つことでしょう。」

そう言うと、妖精の姿は、ぼんやりかすんできて、またもとの木が前に立っているのです。

^11^へ進みましょう。

^11^

不思議な体験をしたミクンサ(あなた)は、また、地図にしたがって、南へと歩き始めました。

歩くうちに、木の数も減り、やがて森から抜けでました。空にはまぶしい太陽がいつものように輝いています。しばらく行くと、細い川が見

えてきました。

川の近くまで行くと、一本の丸太で作られた橋が目にとまりました。

橋を渡り始めてから気がついたことですが、橋の途中にずた袋が落ちていたのです。ミクンサ(あなた)は、恐る恐る近寄ります。そして、思わず、アッと、声を上げてしまいました。ずた袋ではなく、人だったのです。

よく見ると男の人です。死んでるように見えます。それでこわごわ確かめに近寄って、声をかけようとしたとたん、ヌツと手が伸びて、足首をつかまれました。ギャアと言って、腰を抜かしてしまったのは言うまでもありません。男は、

「どうぞ助けてください。」

と言いながら、泥だらけの手をのばしてきます。ミクンサ(あなた)は、必死ではらいのけました。

「どうか逃げないでください。私を助けてください。」

涙を流しながら、男が必死に頼むので、かわいそうになって、話を聞くことにしました。

「私は昔、キシケイヨと言う村に住んでいた、トオイヨと言うものです。私は村で強盗を働いていました。」

昔の私は、欲張りで、自分が良ければそれで良いと言う考えでした。弟と一緒に、カスタネットを鳴らしては、お金や宝石を人からうばって

いました。カスタネットには魔法がかかっていて、（砂になれ）と念じて、それを鳴らせば、たちまち相手は砂になってしまったのでした。

ある夜、道を歩いていると、向こうから、大きなカバンを下げた人影が来るではないですか。

（しめた。）と思いました。私はすれ違うしゅんかんを待ちました。（いまだ。）突然、後ろから飛びかかり、カバンをひったくろうとしました。

ところが相手もただ者ではなく、それを許しません。それどころか、反撃に出られて、こちらの方が危なくなってきたのです。（まずい。）そう思った私はポケットからカスタネットを取り出し、それを鳴らしたのです。

そのとたん相手は苦しんで立ち上がりました。月明かりが顔を照らします。ところが月明かりに照らされた、その顔は、なんと弟だったので。みるみる弟は目の前で砂になってしまいました。」

そう言うと、深いため息をつきました。話を聞いていたミクンサ（あなた）の体がふるえています。男はいかにも後悔した様子で話を続けました。

「その時、初めてわかったんです。自分のやってきたことが、どれだけ、罪の深いことかを。そして、大切なものは、物やお金ではなく、優しく心を通わせることだということを。でも、気のつくのが遅すぎました。

その後、私は、捕まり、裸にされ、村を追い出されました。村を出てからと言うもの、危ない目に何度もあいました。食べるものもめったに手に入りません。私がした事は、とても悪いことだと思いますし、こんな目に会うのも仕方ありません。でも、何とか生きのびて、もう一度やり直したいのです。」

そう言い終わると、男は、気を失いました。どう見ても何日も食べていないようです。

さて、あなたのザックには食べ物がありますが、入っています。それをあげれば、この男は助かるでしょう。しかしあげてしまったら、これからの旅で、自分がうえて死んでしまうかもしれないのです。自分には村を救うために、手袋を買いに行くための旅がまだ残っているのです。よくよく考えてみれば、この人は、悪いことをした人です。こうなるのが当たり前のような気もしてきます。でも、なんだかかわいそうです。さあ、どうしますか。もし、この男に食べ物を分け与えてあげるならば、 $\wedge 18 \vee$ 、これからの自分の使命を考えて、涙を飲んで、あげずに、通り過ぎるなら、 $\wedge 25 \vee$ へ進みましょう

ミクンサ(あなた)は、泳ぐことを選んだのです。湖に飛び込むと、まだ見えぬ向こう岸に向かって泳ぎ始めました。かなり泳いだ後、岸を振り返ってみましたが、岸辺の火事は、一向におさまっていません。疲れたからといっても、戻れないのです。前へ進むだけです。

ミクンサ(あなた)は、一生懸命泳ぎました。向こう岸に着くことだけを考えて、ひたすら泳ぎました。疲れてきた時は、

「幸せの手袋」

と何度もつぶやいて、自分をはげしました。

ところが、ミクンサ(あなた)も人間です。三日も泳ぎ続けると手も足も力つきる時が来たのです。

(こんなところで、死にたくない。まだ手袋を買っていないんだ。)

と、心の中で叫びました。

その時です。体がなんだか熱くなり始めたのです。それだけではありません。全身から光が飛び出し、その光はミクンサ(あなた)を包み込んだのです。するとどうでしょう、体はみるみる水面から離れ、空中に浮かんだかと思うと、向こう岸に向かって動き始めたのです。間違いありません、これは、森で食べた光る果実の力です。

こうして、ミクンサ(あなた)は、危機一髪、難を逃れ、湖を渡ったのでした。

△7▽へ進みましょう。

△13▽

怪物は、手につかんだものを口にほおばると、グシャリグシャリと食べ始めました。ついにミクンサ(あなた)の体は……。いえいえ、ミクンサ(あなた)は無事に生きています。食べられたと思ったのは、実はオレンジ色の実だったのです。

どうやら、怪物は実のほうに気をとられて、すぐそばに人間の子供がいるなどわからないようです。

「もし、僕も見つかったら、あんな風になってしまう。」

ミクンサ(あなた)は息を殺して、じっと岩の影に隠れています。怪物はあたりにある木の枝から実をむしりとるだけむしり取ると、口にほおばり、オレンジ色の汁をしたたらせました。そして、さんざん食べ散らかすと、満足そうに湖に帰っていきました。やがて、体は、水中に消え、水面には小さな波だけが残りました。

「もう大丈夫。」

ミクンサ(あなた)は岩かげからゆっくりと出てきました。

「やれやれ、なんて恐ろしい怪物なんだ。」

と言ったとたん、体は身動きできなくなりました。怪物はもう一匹陸に上がっていたのです。そして目の前にいるのです。もうだめかと、目を

つむりました。するとどうでしょう、

「お前は一体、誰だ。」

と、怪物がしゃべったのです。

△20▽へ進みましょう。

△14▽

十日目の朝の事、思いがけない目に合うのでした。いつものように太陽があがり、じりじりと、暑くなる頃でした。テントを張っていると、いつもと様子が違うことに気がついたのです。

遠くを見ると、空は黄色くかすんでいます。それは、やがてみるみる広がり、こちらにやってくるのです。次第に太陽が見えなくなってきたかと思った時は、もう、砂嵐の真ただなかにいました。

強くすさまじい勢いで吹く風と砂は、ミクンサ(あなた)をおそいます。必死にテントにしがみつき、体を伏せているのですが、人もテントも、まるで紙切れのように無力です。

ついに耐えきれず、テントもミクンサ(あなた)も、何回かにわたって、飛ばされました。そして、砂漠のくぼみに落ちたとき、体は止まり

ました。

砂嵐は、夜になるまで続き、やがてもとの静けさに戻りました。涼しく、優しい夜は、砂嵐とたたかい続けたミクンサ(あなた)を包み込み、深い眠りに誘いました。

さて、朝が来ました。太陽はいつものように砂漠をジリジリと照りつけます。暑さに目を覚ましたミクンサ(あなた)は、はっとしました。なぜなら、今まで守ってくれたテントが風に飛ばされてなくなってしまったのです。

ようしやなく、照りつける太陽は、ミクンサ(あなた)をおそいます。太陽が真上にあがった頃は、ミイラのようにひからびていました。

「どうすればいいんだ。まだ死ぬわけにはいかない。」

そう言って倒れました。もし、魔法の水の袋を持っているなら、 $\wedge 21$
 $\vee$ へ、持っていないなら $\wedge 28\vee$ へ進みましょう。

$\wedge 15\vee$

ミクンサ(あなた)は、立ち上がり、力強く歩き始めました。

七日歩くと、大きな川にぶつかりました。そこで、地図にしたがい、

この川をさかのぼることにしました。川をさかのぼると、あたりは草原となり、様々な動物が見えてきます。そしてさらに、さかのぼると、川はだんだんせまくなり、流れも速くなるのがわかります。

道は次第に上り坂になり、あたりには高い木々が多くなります。あたりが暗く、涼しくなってきた頃には、深い森の中を歩いていました。

さらに上ると近くに流れる激流の音も静かになり、やがて水音は消えました。木々も減り、ごろごろとした石や岩が目立ちます。

ミクンサ(あなた)は岩に腰を下ろして地図を広げました。

「間違いない。この山を越えた向こう側に、魔法使いマヌズミの洞窟があるんだ。でも、その前にこの山を越えなければならない。」

そうつぶやいて、目の前に立ちはだかる、剣の形をした山の頂上をにらみました。ここは、まだふもとから半分も来ていないところで、頂上ははるか彼方です。これがミクンサ(あなた)にとって、最後で最大の試練なのです。

△22△へ進みましょう。

何とやることでしょうか、一羽のワシが、ミクンサ(あなた)をつかんで、舞い上がってくるではありませんか。その足は、やがて冷たくなったミクンサ(あなた)の体をゆっくり山の頂上に下ろしました。

そして、くちばしを雪に突き立てるとミクンサ(あなた)のまわりを何回か回りました。するとどうでしょう。くちばしで描かれた円の中の雪は、またたくまにオレンジ色にかわり、オレンジ色の光はミクンサ(あなた)を包み込み始めたではありませんか。すると、みるみる顔は薄桃色に戻り始め、ついにまぶたが開くかに見えました。

ところが奇跡は五分と続かず、また青白い顔に戻ってしまいました。ワシはけたたましく泣き始めたかと思うと、その姿は、みるみる子供に変わりました。それは、ミクンサ(あなた)が助けた、あの魔法使いの二番目の弟子だったのです。

「どうか、生き返ってくれ、君に死んでもらいたくないんだ。」
そうさけぶと、涙を流しました。その時また一羽のワシが舞い降りてきました。今度は少し大きめです。みるみる人間の姿に変わりました。
「なぜお前は、こんな奴を助け出したんだ。何の得にもならないだろうに。」

「兄さん、この子が、僕にかけられた、千年の魔法をといってくれた恩人なんです。ですから、どうしても生き返ってもらいたいんです。」
そういうとまた涙を流しました。

一番目の弟子でもある兄は、しばらく考え込んでいましたが、決心したように、きっぱり言いました。

「助ける方法の一つある。それはお前と私の魔法の力を重ねることだ。」

△9▽へ進みましょう。

△17▽

不思議に光る果実を枝から、もぎ取りました。危険な予感がしましたが、どうにも我慢できません。ついにおいしそうな光る果実にかぶりつきました。

でも、なんともありません。かえって、体は楽になり、お腹も満腹になりました。ところがです。しばらくたつと、体が急にしびれてきて、手足が動かなくなってきました。だんだん気も遠くなり、地面にばったりと倒れてしまいました。気がつくと、自分を見下ろしている一人の美しい女の妖精がいました。

「気がついたようですね。あなたの食べた果実は力の果実というものです。きっとこれからの旅に役に立つことでしょう。」

そう言ったかと思うと、妖精の姿は、消えていきました。

△11▽へ進みましょう。

ミクンサ(あなた)は、しばらく考え込んでいましたが、やはり、困っている人を見過ごしてしまいうわけにはいきません。決心すると、川から水をくんで、男にゆっくり飲ませ、ザックに入っている食べ物を食べさせてあげました。男は感謝しながら、おいしそうに食べ始めました。

すると、どうでしょう。ひと口食べることに、体はみるみる若返り、体に着いた泥までも消えていきます。そして、ついに、小さな子供になってしまいました。

「どうもありがとう。僕は、魔法使いマヌズミーにお仕えする。二番目の弟子のピッチ。やっと君が魔法をとってくれたんで助かったよ。実は、千年前に、僕がマヌズミー様の大事にしている杖を、いたずらして折ってしまったんだ。叱られたの何の、それはすごかったよ。それで、罰として、さっきの姿に変えられてしまったのさ。そして、こう言われたんだ。」

「お前にかけられた魔法は、本当に優しい心を持った人間に出会うま

で、絶対にとける事は無い。それまで、出会う人みんなを試してみるが良い。いつの日か、きっと見つかるだろうよ。」

「ところがそんな人間はどこを探しても見つからず、とうとう千年たつてしまったんだ。そしてやっと君が現れたんだ。本当にありがとう。お礼に、僕は君に素敵な魔法をかけてあげよう。」

そう言うと、ミクンサ(あなた)のお腹に手を当て、ぶつぶつ意味のわからない呪文を唱えました。いちどお腹が、ちょこっとふくれあがり、またしぼみました。

「これでよし。もう、これからは、何も食べなくても、お腹は空かないはずだよ。」

気がつくと、魔法使いの弟子の姿はなく、声だけが残りました。

ミクンサ(あなた)は、あつけにとられて、しばらく立ちすくんでいましたが、やがて、地図にしたがって橋を渡り、また、南へと向かいしました。

Λ8Vへ進みましょう。

Λ19V

ミクンサ(あなた)は、泳ぐことを選んだのです。湖に飛び込むと、まだ見えぬ、向こう岸に向かって泳ぎ始めました。かなり、泳いだ後、岸を振り返ってみましたが、岸辺の火事は、いっこうにおさまっていませ

ん。疲れたからといっても、戻れないのです。前へ進むだけです。

ミクンサ(あなた)は、一生懸命泳ぎました。向こう岸に着くことだけを考えて、ひたすら泳ぎました。疲れてきた時は、

「幸せの手袋」

と何度もつぶやいて、自分をはげましました。

ところが、ミクンサ(あなた)も人間です。三日も泳ぎ続けると手も足も力つきる時が来たのです。

(こんなところで、死にたくない。まだ手袋を買っていないんだ。)
と心の中で叫びました。

その時です。強い風がひと吹きしたかと思うと、その後から大きな波が押し寄せてきました。ザブンと波が来た時、ゴホッと水を飲み込みました。苦しんで、ゲホッと吐き出したひょうしに、また水を飲み込みました。それを二、三度繰り返すうちに、気が遠くなっていきました。

こうして、ミクンサ(あなた)は、ゆっくり湖の底に沈んでいきました。気がつくと、ミクンサ(あなた)の体は、魚の姿に変わっていました。もう、手袋など買いに行けるわけはありません。かわいそうですが、ここで冒険は終わりです。

^20^

「言わなければ、食ってしまうぞ。」

雷のような声が鳴り響いたかと思うと、怪物はミクンサ(あなた)の体を片手でつかみあげました。

でもミクンサ(あなた)は、勇気をふるいおこして、叫びました。

「クブテ村のミクンサ!!」

「なかなか、小さな体にあわず、度胸がある奴だ。では、聞くが、ミクンサよ、なぜお前はここにいるのだ。ここは人間のくる場所では無いはずだ。」

そこでミクンサ(あなた)は、魔法使いマヌズミの所へ、手袋を買いに行かなくてはならなくなったこと、自分がその役目で旅をしていることを話して聞かせました。怪物は聞き終わると、しばらくだまっていたが、ニタリとして、こんなことを言い出しました。

「なるほど、お前の話は、わかった。でも、おまえをただで、ここを通すわけにはいかない。何か、俺に差し出す宝を持っているか。」

「そんなものはない。」

ミクンサ(あなた)は、きっぱりと言いました。

「ならば、通すわけにはいかない。お前を食うだけだ。」

怪物はミクンサ(あなた)を握っているての力を強めました。そこでミクンサ(あなた)は、心の中でつぶやきました。

(今もっているものといえば、銀貨が3枚。でも、これは、手袋を買うためのお金だ。あげるわけにはいかない。目の前にある岩山を見ると、

あちこちに洞穴のようなものがたくさんあるじゃないか。あそこに、逃げ込めば、何とか助かるかもしれない。抜け道だって、きっとあるはずだ。いや、安全を考えて銀貨を渡そう。待てよ、もし渡しても、助かる保証は無い。とにかく、何をするにも、怪物の手のひらから、離れることがまず先だ。」

「分りました、今渡しますから、この手を離してください。そうしないと渡しにくくて困るんです。」

こうして、まず、怪物の手のひらから出ました。さて、これからが、腕の見せ所です。もし、すきを見て、岩山の洞穴に逃げ込むなら、△27▽へ、全部はあげられないので、ごまかして1枚だけ銀貨を渡すなら、△31▽へ、知恵と勇気で戦うなら、△30▽へ進みましょう。

△21▽

倒れ込むと、熱い砂が顔を焼きました。気もだいぶ遠くなっていきましたが、死ぬわけにはいかないという強い気持ちは、持ち続けました。

突然、背中に冷たいものが広がるのを感じました。それは、どんな体を包み、ひからびたミクンサ(あなた)をうるおしていったのです。これは、まさしく、怪物からもらった魔法の水の袋の力でした。背中のザックに入っている水の袋が、願いを聞き届け、冷たい水をあふれさせ始めたのです。

それからと言うもの、水のあふれ出る袋を頭に寄せ、昼間でも元気に砂漠を歩けるようになったのです。おかげで、一日に進む距離も長くなり、あと、十日かかると思われていた砂漠も、わずか六日で越えられたのです。Λ5Vへ進みましょう。

Λ22V

あいかわらず、登るにしたがって、足もとは、どんどん急になっていきます。気温はぐんぐん下がりはじめ、いきなり強い雨が降ったかと思うと、晴れ間が出たり、強い風が吹いたかと思うと、風はぴったりとやんだりします。

でもミクンサ(あなた)は、わき目もふらずにひたすら登っていきます。さらに、さらに、あたりの空気は凍るほど冷たくなっていきます。手がかじかみ、しびれてきた頃には、深い雪の中を腰までつかりながら進んでいました。

雪は、谷と谷の間にまで、見せかけの橋を作っているのです、もし万が一、そこに足をふみ入れたら最後、その橋はくずれ、ミクンサ(あなた)は谷底に落ちてしまうでしょう。しかし、所々に大小の谷がぽっかり空いていようと、この雪の積もり方では、気をつけようありません。運を天にまかせるだけです。恐ろしいのは、それだけではありません。なだれや吹雪も、簡単に命を奪うことでしょう。

そうした危険の中、ミクンサ(あなた)は進んでいましたが、運良く、無事に、頂上まであと八時間というところまでこぎつけることができました。

「さあ、あともう少しだ。あの頂上をこえれば、マヌズミの洞窟が見えるはずだ。」

ミクンサ(あなた)の胸は高なり、足取りも力強くなります。

二時間が過ぎました。その頃になると、風が幾分強く吹き始めるのを感じました。さらに二時間がすぎると、あたりは吹雪で、一メートルさえも見えないほどになりました。ミクンサ(あなた)が恐れていた、あつてはいけなことが起こり始めたのです。

Λ29∨へ進みましょう。

Λ23∨

ここは、山の頂上です。空は晴れわたり、風ひとつありません。山の向こう側は雪もほとんどありません。とてもすがすがしいながめでした。

さて、頂上から下を見下ろすと、切り立ったガケがあり、そのガケの途中に、洞くつらしいものが、かすかに見えます。

ミクンサ(あなた)は、足をすべらせないように注意して、岩の出っ張りや割れ目につかまり、足をかけながら降りて行きます。時々、足をず

るっとすべらせて落ちそうになりますが、必死にしがみついていたえます。

三百メートルほど降りると、少し広めの、棚のような場所に出ました。どうやら道になっているようです。そこでこの道にそって、まず下ることにしました。

十分ほど下ると、行き止まりになっていました。ふと見ると、岩から水がちよろちよろ出ていて、それを大きな石のかめが受けていました。しかたがないので、また道をひき引き返し、今度はどんどん登っていききました。クネクネとした道を二時間登り続けると、先ほどまであれば、晴れ渡っていたはずの山に、霧が出始め、ついに一メートル先も見えなくなっていました。うっかりすると、ガケから落ちてしまうかもしれません。そこで、山側の壁をつたって歩くことにしました。

ところが突然、体が傾き、バランスをくずして、倒れ込んでしまったのです。でも地面があったので、ほんと胸をなで下ろしました。

よく調べてみると、つたって歩いてきたその壁が、突然なくなっているのです。そうです、ここが魔法使いマヌズミーの洞窟なのです。

△32▽へ進みましょう。

△24▽

不思議に光る果実は、とてもおいしそうです。でも、もし食べたら、

自分の体はどうなるか分かりません。危険を犯してまで、食べようとは思いません。まだ旅は長いのです。

ミクンサ(あなた)は、その木の前を目をつぶって通り過ぎました。

△11▽へ進みましょう。

△25▽

話を聞くと、とてもかわいそうな気がします。でも、ミクンサ(あなた)は、心に、こう言い聞かせました。

「僕には、村にいる大勢の人のために、これから手袋を買いに行かなくてはならないんだ。この男にかまっていたら、それができなくなってしまふんだ。そもそも、この男が悪いんだ。」

ミクンサ(あなた)は、男を見捨てて橋を渡って行こうとしました。

しかし、突然後ろから足首をつかまれ、そのひょうしに足の橋のらんかに顔をぶつけました。

「このはくじょう者め。お前のような、心の冷たいものには、魔法使いマヌズミー様は手袋などを売るなどないわ。お前は失格だ。村へ帰れ。」

ミクンサ(あなた)が振り返ると、男はみるみる化け物の姿に変わりました。マヌズミーの家来だったのです。やがて化け物は、長い尻尾を大きく回し始め、ピシリと地面をたたきました。ミクンサ(あなた)は、目

を回して倒れました。

気がつくと、懐かしい村の広場にいました。ところが、村の人たちは、ミクンサ(あなた)のことに気づきません。

「僕だよ。ミクンサ(あなた)だよ。」

といっても、むだでした。なぜなら、当たり前でしょう。ミクンサ(あなた)は、もう、人間では無いのです。小さな雀になったのです。

したがって、ミクンサ(あなた)の旅はここで終わりです。

^26v

するとどうでしょう。背中に背負っているザックが光り始め、目の前に広がる湖の水面は、音を立てながら、真つ二つに分かれたのです。不思議なことに、歩くのに十分な道が出来上がったのです。それは間違はなく、光る果実の力でした。

こうして、ミクンサ(あなた)は、無事に向こう岸にたどり着くことができました。湖を渡り終わると、また水は元に戻りました。ザックを開けると、果実は跡形なく消えていました。

^7vへ進みましょう。

^27v

「それでは、しょうがありません。とても小さいけれど、ここに素敵

な宝石があるので、近くに来てみてください。」

怪物はよく見ようと顔を近づけて来ます。その時です。ミクンサ(あなた)は、近くにあった石を力いっぱい怪物の目に投げつけたのです。

ちょうどまい具合に3つあるうちの1つに、命中しました。

(しめた。)

ミクンサ(あなた)は、のたうちまわる怪物を後にして、まんまと洞穴に飛び込んだのでした。

「よくも、俺をだましたな。」

と叫んで見ても、憎らしい子供の姿はありませんでした。

さてミクンサ(あなた)と言えば、暗い洞穴を、奥へ奥へと進んでいきます。もし外に戻ろうものなら、オレンジ色の実の様にぐしゃぐしゃにされてしまうでしょう。何が何でも、抜け道を探し出さなければならないわけです。

しばらく行くと、冷たい風が奥の方から吹いてきました。汗をびっしよりかいていたので、とても気持ちよく感じられます。

(あーなんて、気持ちの良い風だろう。)

そう思った時、ミクンサ(あなた)は、もう人間ではありませんでした。

暗い洞穴に住みやすくてきている、一匹のミミズになっていたのです。

残念ながらあなたの旅は終わりです。

^28v

倒れこむと、熱い砂が顔を焼きました。気もだいぶ遠くなっていきましたが、死ぬわけにはいかないという強い気持ちは、持ち続けました。そうは言うものの、背中ザックの中には、空になった水筒と魔法使いの住み家へ向かうための地図だけで、ミクンサ(あなた)を救うものなどありません。しだいに体はひからびて行き、どんどん小さくなっていきました。

いつの間にか、体の外側は、よろいのように、固い甲羅でおおわれ、手にははさみ、お尻には長い尻尾が生えてきました。何とか、生きたいと思う心がミクンサ(あなた)をサソリの姿に変えてしまったのです。でも、もう旅を続けることができません。残念ながら、あなたの旅は、ここで終わります。

^29v

「あと四時間登れば……。」

しかし、さっきまで見えていたあの頂上の姿も今となっては、吹雪で見えません。それどころか、自分がどこへ向かって歩いているのかもわからないのです。冷たさに手も足も感覚がなくなり、目も耳も口も役目を果たさなくなりました。

だんだん自分の意識も薄れてきた時、突然、大木さえなぎ倒すほどの

突風が、ミクンサ(あなた)をおそいました。バーンと体が飛ばされ三十メートル先へ落ちました。

ところが運悪く、谷と谷の間にある、雪でできた見せかけだけの橋だったからたまりません。

ゴゴゴゴーと言うすさまじい音とともに、橋がくずれさり、ミクンサ(あなた)の姿も谷底へ消えていきました。

しばらくの間、雪煙が立ち昇りましたが、相変わらずの激しい吹雪に打ち消されていきました。

さて、次の日の朝になりました。昨日とはうってかわっての、良い天気です。空は晴れわたり、雲ひとつありません。ただ、どこを探してもミクンサ(あなた)の姿は見つかりませんでした。きっと、谷底の雪の中のどこかにうずもれているのでしょう。

残念ながら、この旅はここで終わりです。ミクンサ(あなた)は、マヌズミーの洞窟を目前にして、息絶えたのです。

いえいえ、ちょっと待ってください。何やら、谷底が、まぶしいくらいに、輝き始めましたよ。

△16▽へ進みましょう。

△30▽

ミクンサ(あなた)は、決心しました。

（銀貨を、あげてしまうわけにはいかない。逃げるにしても、必ず洞穴に抜け道があるとは限らない。怪物と戦うしかない。僕にだってできるさ。僕には、勇気と知恵があるんだ。）

突然何を思ったのか、ミクンサ（あなた）は、湖の方へ駆け出しました。

「やーい、僕に岩ぶつけられるかい。悔しかったらやってごらん。」

それを聞くと、怪物は怒りました。今まで馬鹿にされたことなど一度もなかったのです。岩をつかんでは、投げ始めました。その勢いといったらありません。ただ、あまりにも腹を立てているため、全部、遠くの方へ、ドボンと落ちるだけで、ちっとも当たりません。悔しがれば悔しがるほど、なおさらです。

しばらくすると、湖の水面が激しくなみうち始めました。さっきの怪物が現れたのです。

「この俺に、何の恨みがあって岩をぶつけるんだ。」

カンカンになってやってきます。もちろん、ミクンサ（あなた）の作戦だとは気がつきません。こうして、二匹の怪物のケンカが始まりました。

すさまじいうなり声と地ひびきが続きました。岩山の上からミクンサ（あなた）はよゆうで観戦です。ところが、しばらくたつと、片方が負けて湖に消え、もう片方は傷ついた体を引きずりながら、やってくるではありませんか。その片方とは、さっき散々馬鹿にした方の怪物です。岩

の上から見ていたミクンサ(あなたは)、自分の計画が狂ったことに気づいて、はっとしました。相打ちになると思っていたのが、片方が勝ってしまったからです。

怪物は、ギロつとにらみ、ミクンサ(あなた)をつかみ上げました。

「よくも、俺をひどい目にあわしてくれたな。」

そう言って、にぎりつぶそうとした時です。チャリンと音がして、3枚の銀貨がこぼれ落ちてきました。

「きさま、こんな良いものを持っているじゃないか。」

怪物は、今までの事など忘れたかのように、うれしそうに、銀貨をひろい上げました。

「この銀貨と、お前の勇気と知恵に免じて、助けてやろう。」

と言い出したのです。もう嫌とは言えません。

(魔法使いには事情を話して、後からお金を払うようにしてもらおう。)

そう心の中で思いました。怪物は、言葉を続けました。

「それから、この魔法の水袋を、お前にやろう。欲しいと思った時は、いつでも水が湧き出てくるはずだ。これからのたびに役に立つはずだ。

幸運を祈る。」

そう言うと、ミクンサ(あなた)をはなし、湖へと帰っていきました。

△6△へ進みましょう。

(ひとまず、銀貨をあげるしかないだろう。3枚持っているけど、ごまかしてやれ。)

「分りました。私が持っているのは、1枚の銀貨です。どうかこれ、ここを通してください。」

「どれ、かしてみろ。お、これはいい宝だ。よしここを通れ。」

ミクンサ(あなた)は、それを聞くと、大急ぎで、怪物から離れられた。

ところがあまりにもあわてていたので、転んでしまい、そのひょうしにチャリンと残りの銀貨を落としてしまったのです。

「ちょっと、待て。」

気づかれてしまったからには、しょうがありません。あとは、知恵と勇気が頼みのつなです。

突然何を思ったのか、ミクンサ(あなた)は、湖の方へかけ出ししました。

「やあい、僕に岩をぶつけられるかい。悔しかったらやってごらん。」それを聞くと、怪物がおこりました。今まで馬鹿にされたことなど一度もなかったのです。岩をつかんで、投げ始めました。その勢いといったらありません。ただあまりにも腹を立てているため、全部、遠くの方へ、ドボンと落ちるだけで、ちっとも当たりません。悔しがれば悔し

がるほど、なおさらです。

しばらくすると、湖の水面が激しくなみうち始めました。さっきの怪物が現れたのです。

「この俺に、何の恨みがあって岩をぶつけるんだ。」

カンカンになってやってきます。もちろん、ミクンサ(あなた)の作戦だとは気がつきません。こうして、二匹の怪物のケンカが始まりました。

すさまじいうなり声と地ひびきが続きました。岩山の上からミクンサ(あなた)はよゆうで観戦です。しばらくたつと、二匹の怪物は、そのまま湖の中へ闘いながら、消えていきました。

こうしてミクンサ(あなた)は、助かりましたが、銀貨はもうありません。

(魔法使いには、事情を話して、お金は後から払うようにしてもらおう。)

と心の中で思いました。

△6▽へ進みましょう。

△32▽

もしやと思ったミクンサ(あなたは)、洞窟だと思われる暗い方へゆっくり進んでいきました。

やがて、両側の壁に、間隔をおいて、ろうそくが並び、あたりの様子

が、わかるようになってきます。曲がりくねった道をしばらく行くと、大きな、黒い鉄の扉に突き当たりました。

ミクンサ(あなた)は間違いないと思いました。しかし、待ってください。たとえ、ここが魔法使いマヌズミーの洞窟だとしても、今、手袋を買うお金はありません。事情を説明すればわかってくれるでしょうか。もし、機嫌でもそこねたら、あの、二番目の弟子のように魔法をかけられて、千年もさまようことになるかもしれません。ミクンサ(あなた)が、考え込んでいると、何もしないのに、前の扉が、音もなく開いたのです。

「ミクンサ。恐れずに入りなさい。」

低く静かな声が聞こえてきました。ミクンサ(あなた)は、足が震えて、前に進めません。そんな時、

「大丈夫、心配はいらないよ。」

と、子供の声がしました。見ると、二番目の弟子のピッチです。ピッチは、ミクンサ(あなた)の手を引くと、奥に座っている魔法使いの所へ優しく案内しました。

部屋の様子は、こうです。自然の岩をきれいにくり抜いてあるので、天井も高く、奥行きも広がっています。所々には、いろいろな置物があり、壁には、えんじ色をしたビロードが天井から下がっています。ろうそくの柔らかい光は、それらを照らし、美しく、落ち着いた雰囲気

作っていました。

さて、その部屋の真ん中に大きな、石のテーブルと、イスがあり、脇には一番目の弟子、そしてイスには、何万年も生きてきたとは思えないほど、若々しい老人が、座っていたのです。

「よくぞ、ここまで、頑張った。わしは、お前の旅をずっと見ていたのじゃぞ。かわいいやつじゃ…。だがのう。お前が求めている手袋はここにはない。わしは、そんな便利なものなど持っているわけもないのじや。そもそも、千年前に売ってやった手袋だって、そんな力などなかった…。」

そう言うと、ため息をつき、目を閉じました。やっこの思いで、ミクンサ(あなた)はたずねました。

「それでは、どうして、手袋がきれいに石像にはまっている間は、村が幸福でいられたんですか。」

「いやそれは、手袋の力ではなく、みんなの力だったのじや。誰もが幸せを願い、精一杯の知恵と勇気と優しさを出し合っていたからこそ、魔法などもおよばない、素晴らしい力が生まれたのじや。さて、手袋は一体何だったのかと言う事じやが、手袋にはみんなの心が映し出されるような魔法をかけてかけたのじや。つまり、みんなの心に、強い勇気と知恵と優しさがある限り、手袋は美しいままでいられるし、弱くなればポロボロになると言うわけだ。今の様子を見てみい。村にはそんな

もの、これっぽっちも見つからないだろうが。だが、お前は違う、この旅で、わしに、その大きな力を示してくれた。お前なら、やり直すことができる。村をもとの、幸せと喜びに満ちた村に戻すことができる。さあ、村へ帰って、お前の精一杯の力と心を尽くしてみるがよい。村人が力を合わせた時、手袋はもとに戻る。」

そう言い終えると、手に持っていた太い杖をひと振りしました。ミクンサ(あなた)の体が宙に浮いたかと思うと、みるみる洞窟の外に、運ばれ、入り口は大きな岩がふたをしました。また、魔法使いマヌズミーの千年の眠りの時が来たのです。

気がつくと雲がミクンサ(あなた)を包み込み、村へと運ぶのでした。

終わり

昭和六十年(1985年)に、この物語を書き下ろしました。当時私は、教員生活二年目で、小学校三年生のクラス担任をしていました。

国語の学習の方法に「一読総合法」と言うメソッドがあり、その方法

の一環として、私が子供達にこんな人に育って欲しいという願いをこめて書き下ろしたのがこの物語です。

このメソッドは、先生が司会者となり、子供達が発表していく形式をとります。理論の柱は、短い文章であれば、その中から、漢字の読み、文法、読解、想像、創造などの力を引き出し、国語力の高い子だけでなく、あまり得意でない子でも、何かしらに気づき、発表を通じて、誰でもが授業に参加しながら、互いの能力を高めあうことが出来るという理論です。

一旦、子供達の教科書をロッカーにしまい、段落ごとに印刷したものを配布して、そこからわかること、これから予想されることを考えさせるのです。

学習の始まりが「題名」だけの用紙ですので、「自分なりに、物語を想像して書いてみましょう。」ということで、私を含め、子供達全員が「手袋を買いに」というオリジナルストーリーを書き上げ、記念に文集としてまとめました。

ご存知の通り、本来、これは新美南吉の有名な童話ですが、生き生きとした個性あふれる子供達の文集になったことが良き思い出です。

私は、かつて高校時代に文化祭の出し物でクラス用に書き下ろした演劇の脚本のテーマを、受け持ちの小学三年生の子たちに喜んでもらえるような物語に作り替えました。また、この頃流行っていたアドベンチャー

ーゲームと言う本の形式があり、それをまねて作ったのがこの作品です。

高校時代のクラス劇の題名は「幸せの箱」と言うものです。悲惨な村の状況に立ち上がって若者達が、噂に聞く魔法使いが持っている「幸せの箱」を手に入れる旅を始めるのです。いくつもの試練があって、ついに魔法使いのところにたどり着くのですが、箱を開けて覗き込むと、そこには水が湛えてあり自分達の姿が映し出されるだけでした。そして魔法使いの声が聞こえてきます。主人公たちは気づくのです。幸せと言うのは、人に与えられるものではなく、自分たちで作っていくものであるということに。

ちなみに種明かしをすると、本文に出てくるカタカナの名称は、当時私が勤務していた、「瑞沼(マヌズミ)小学校」、「三年三組(ミクンサ)」。クラス目標の「良い音(トオイヨ)」「良い景色(キシケイヨ)」でした。

子供向けの童話は、前年に勤務した学校で書いた「算数物語(二等辺三角形物語)」に続いての二作目でしたが、翌年、高校の世界史教員として勤務し始めたので、物語を書く機会もなく、現在に至ります。高校の時、短編のSF小説を数作書きましたが、今回の復刻作業を機に、再び何か書き始めたいという思いを持つようになっていきます。

長年、過去に書いた自分の手書き作品を、活字におこしたいと思って

いたのですが、コンピュータの音声変換の技術が高まり、フル活用して、今回、驚くべき短時間で作業が完成出来たことは、喜びです。

追記

当時、関わりのあった児童、保護者、先生の皆様に、このような作品を書く機会を与えていただき、感謝申し上げます。

2023年3月